

## 統語的プライミング効果を利用したペアワークの可能性 —効果的な授業内タスクに向けての予備調査—

森下 美和

神戸学院大学グローバル・コミュニケーション学部 〒650-8586 神戸市中央区港島 1-1-3

E-mail: miwa@gc.kobegakuin.ac.jp

**あらまし** 著者はこれまで、日本人英語学習者が英語を使用する際に見られる統語的プライミングならびにインタラクションにおける統語的プライミングの英語学習への活用に関心を持ち、さまざまな心理言語学的実験を行ってきた (Morishita, 2011, 2013; Morishita, Sato, & Yokokawa, 2011 ほか)。また、日本人英語学習者の wh 疑問文の使用に関する調査も行っているが、英語母語話者と学生間のインタビュー形式の対話では、wh 疑問文のリストをもとにやりとりをしても、学生の wh 疑問文産出数は極めて限られており、統語的プライミングの傾向はほとんど見られなかった (森下・河村・原田, 2017)。本調査では、wh 疑問文を中核とした対話的なやり取りの中で日本人英語学習者の構文的な理解や運用を高めるには、どのような活動を構想するとよいかを検討することを視野に、McDonough (2011) を参考に授業内でペアワークを行った。国内の私立大学文系学部の大学 4 年生 36 名を対象に、wh 疑問文の産出率や統語的プライミングの傾向を調べることを目的とし、異なる 2 つのパスセージについてペアで交互に質問し合うタスクを実施した。本調査は 1 回のみの実施であったため、学習効果について具体的に調べることはできなかったが、ペアワーク後の学生のふりかえりにおけるコメントから、同レベルの学習者同士のインタラクションであっても、統語的プライミング実験の手法でモデルを提示しながら、意味のあるやりとりを行うことで、ある程度の学習効果を得られる可能性が示唆された。

**キーワード** wh 疑問文, 情報交換タスク, 統語的プライミング

## Information-Exchange Tasks Using Syntactic Priming Effects — A Pilot Study for Designing Effective In-Class Activities —

Miwa MORISHITA

Faculty of Global Communication, Kobe Gakuin University 1-1-3 Minatojima, Chuo-ku, Kobe 650-8586 Japan

E-mail: miwa@gc.kobegakuin.ac.jp

**Abstract** The author has conducted a series of psycholinguistic experiments with Japanese EFL learners, focusing on syntactic priming among them as well as possible use of syntactic priming for language learning through interactional tasks. She has also researched the practical use of wh-question sentences in those learners. Morishita, Kawamura, and Harada (2017) found that in dialogues between a native English speaker and Japanese EFL learners (university undergraduates), the learners couldn't produce wh-question sentences promptly and precisely, and therefore, tendencies of syntactic priming were rarely observed. This paper discusses how to design possibly effective in-class activities that would help improve Japanese EFL learners' comprehension and production of grammatical structures during interactional tasks using wh-question sentences based on the procedure described in McDonough (2011). In particular, results of interactional tasks among 36 four-year students at a private university in Japan grouped into pairs are summarized and reported. In those tasks, they read different passages and asked each other questions in turn, and production and priming tendency of wh-questions were investigated. As this study was conducted only once in the course of the class, any possible learning effects were not verified, but the reflective comments by the participating students after the experiment suggest that some level of learning through meaningful interchange can be achieved even among students with the same proficiency levels, when students are given model structures for constructing what they would want to convey based on the formats of syntactic priming experiments.

**Keywords** wh-question sentences, information-exchange task, syntactic priming

森下美和, “統語的プライミング効果を利用したペアワークの可能性—効果的な授業内タスクに向けての予備調査—”,  
言語学習と教育言語学 2019 年度版, pp. 73-80,

日本英語教育学会・日本教育言語学会合同編集委員会編集, 早稲田大学情報教育研究所発行, 2020 年 3 月 31 日.

Copyright © 2019-2020 by Morishita, M. All rights reserved.

## 1. はじめに

著者はこれまで、統語的プライミング（言語産出プロセスにおいて、直前に処理した文と同じ統語構造パターンを用いる傾向；Bock, 1986）の観点から、主に授与動詞（PO; prepositional object / DO; double object）構文を用いて、一連の実証的研究を進めてきた。

昨今では、特にインタラクションにおける統語的プライミングに関心を持ち、wh 疑問文を使用した調査を行っている（森下, 2018；森下・河村・原田, 2017 ほか）。英語母語話者と学生間のインタビュー形式の対話では、wh 疑問文（プライム文）のリストをもとにやりとりをしても、学生の wh 疑問文産出数は極めて限られており、統語的プライミングの傾向もほとんど見られなかった（森下・河村・原田, 2017）。

本調査では、wh 疑問文を中核とした対話的なやり取りの中で日本人英語学習者の構文的な理解や運用を高めるには、どのような活動を構想するとよいかを検討することを視野に、McDonough (2011) における、学生がお互いのパッセージについて交互に質問し合うタスクの手法を参考に、授業内でペアワークを行った。

McDonough (2011) は、タイ人英語学習者 33 名を対象に、4 種類の情報交換タスクを使用した統語的プライミング実験を行い、wh 疑問文を引き出すのに効果的なタスクについて比較検討した。本調査では、McDonough (2011) で紹介されたタスクのうち、パッセージを使用した情報交換タスクを参考にペアワークを行い、wh 疑問文の産出率や統語的プライミングの傾向について調べることを目的とした。

## 2. 調査

### 2.1. 協力者

本調査は、約 4 か月間の英語圏での留学を経験した大学 4 年生を対象とする「通訳・翻訳の方法」クラスで実施した（協力者の所属学部では、カリキュラムの一環として 3 年次前期に全員が英語圏へ留学することになっている）。受講生 42 名のうち、当日出席していた 36 名分のデータを分析対象とする。TOEIC の平均スコアは 551.9 点（最高点 745 点，最低点 375 点），標準偏差は 104.1 であった。学生はランダムに Student A と Student B のペアに振り分けたが、結果的に Student A の TOEIC の平均スコアは 590.6 ( $SD=100.3$ )，Student B の TOEIC の平均スコアは 513.3 ( $SD=95.4$ ) で、両者間には有意差が認められた ( $p < .05$ )。

### 2.2. 素材

本調査では、授業でテキストとして指定している「通訳とコミュニケーションの総合演習[改訂版]」（南雲堂, 2017）の Unit 3「趣味」（pp. 20-21）から「短文の繰り返し練習①, ②」に含まれる各 10 文をピックア

ップし、質問となる wh 疑問文が作りやすいように一部修正のうえ、異なる 2 つのパッセージ「音楽」、「読書」を作成した。

### 2.3. 手順

McDonough (2011) を参考に、お互いのパッセージについて交互に質問し合うタスクを作成した。Student A（18 名）用と Student B（18 名）用の 2 種類のワークシート（Appendix 1）は、いずれも Part 1 と Part 2 から構成されており、Part 1 では、それぞれ与えられたパッセージ（「音楽」または「読書」）を黙読するよう指示した。Part 2 では、相手のパッセージに関する質問が 10 問与えられており、フルセンテンスを読み上げるだけのもの（プライム）と、疑問詞といくつかの単語のみ与えられており、質問の解答例（Answer key）も参考にしながら自分で疑問文を完成させる必要があるもの（ターゲット）が 5 問ずつ含まれていた。

Student A の質問リストには偶数番号、Student B の質問リストには奇数番号がそれぞれ割り当てられており、Student B の 1 番から Student A の 20 番まで、番号順に交互に質問・解答するよう指示した。Student A の質問リストは、前半がターゲット、後半がプライムで構成されており、Student B の質問リストは、前半がプライム、後半がターゲットで構成されていた。したがって、(1) Student B が質問（プライム）→ Student A が解答→ (2) Student A が質問（ターゲット）→ Student B が解答というようにやりとりが進むようになっていた。

また、1 つの Q&A が終了する度に、Answer key を参考に、パートナーの解答を○か×で判断させた。すべての Q&A が終了したペアは、お互いに○と×の数をカウントし、パートナーのスコアを採点した（10 点満点）。この作業は、wh 疑問文を産出させ、そのプライミングの傾向を見るという本来の目的から目を逸らせるためのカバータスクとして行われた。

すべての対話は CALL 教室の音声録音システムで録音した。各学生の PC 上でもサウンドレコーダーを使用して録音後、自分の産出した wh 疑問文（ターゲット）の書き起こしをさせた。

## 3. 結果と考察

### 3.1. ペアワークにおける wh 疑問文産出率

Student A 用と Student B 用の 2 種類のワークシートを統合させたターゲットの質問リスト（前者は#2-10，後者は#11-19）と、そのうち wh 疑問文を正しく産出できた割合を表 1 に示す（番号はワークシートのまま）。なお、McDonough (2011) に倣い、助動詞（do, be など）が正しい位置で使われていれば正答と見なし、単複・時制の一致などに関する文法的エラーは考慮しないものとした。

表 1 ペアワークにおける wh 疑問文産出率

#	Target	Expected answer	wh 疑問文産出率
2	What / fewer young people / read?	What do fewer young people read?	72.2%
4	What / an increasing number of people / buying?	What are an increasing number of people buying?	77.8%
6	Who / still prefer / print books?	Who still prefer[s] print books?	33.3%
8	What / we / feel / when we hold a “real” book?	What do [can] we feel when we hold a “real” book?	72.2%
10	What / easier for us?	What is easier for us?	88.9%
11	What / this festival / feature?	What does this festival feature?	55.6%
13	What / the festival’s name / come from?	What does [did] the festival’s name come from?	72.2%
15	Who / <i>The Marriage of Figaro</i> ?	Who made [wrote, composed] <i>The Marriage of Figaro</i> ?	38.9%
17	Where / the festival / during the Golden Week holidays?	Where does [is] the festival take place [held] during the Golden Week holidays?	16.7%
19	What / music / performed at the festival?	What [kind of] music is [are] performed at the festival?	50.0%

学生全体の wh 疑問文産出率は 57.8%，Student A の wh 疑問文産出率 (#2～10) は 68.9%，Student B の wh 疑問文産出率 (#11～19) は 46.7%であった。

全体として、助動詞の抜けが最も顕著なエラーであった (e.g., (2) What  $\Phi$  fewer young people read? / (4) What  $\Phi$  an increasing number of people buying? / (8) What  $\Phi$  we feel when we hold a real book?). (2), (4), (8), (10), (13) などの比較的シンプルな構文では、7 割以上の産出率であったが、(11) では動詞 feature (e.g., What is this festival's feature? / What is this festival in feature?), (19) では動詞 perform (e.g., What kind of music they performed at the festival?) などの使い方についての混乱により、やや産出率が下がっていると思われる。

(6) の主語疑問詞疑問文については、むしろ不要な助動詞が挿入されており (e.g., Who is / do / does still

prefer print books?), 他と比べて wh 疑問文産出率が極端に低かった。このことは、wh 疑問文に関するこれまでの著者たちの研究結果 (原田・森下, 2014; Harada & Morishita, 2016 ほか) と一致するものであった。一方、(15) についてはむしろ、*The Marriage of Figaro* がモーツァルト (ないしはいずれかの作曲家) によって作られたオペラ (ないしは何らかの音楽作品) であるという知識がない学生が多かったため、be 動詞 is を挿入した例が大半を占めていた (e.g., Who is *The Marriage of Figaro*?)。

(17) の産出率ももっとも低かったが、そのほとんどが is を挿入しただけで held を挿入せずに終わっていた (e.g., Where is the festival during the golden week holidays?). 意味的にはおかしいが、文法的には間違っていない典型的な例だと言える。同じ受動態であっても、(19) では performed が提示されていたためか、産出率は (17) ほど低くなかった。

### 3.2. 統語的プライミング

本調査では、前半では Student B から質問を開始し、プライム→ターゲットの順番で質問→解答を繰り返した。後半でも引き続き、前半と同じ順番で行ったため、タスク全体としての統語的プライミングの可能性はあるものの、部分的にはプライム→ターゲットの順番になっていない。そのためか、表 1 における Student A (2~10) と Student B (11~19) の wh 疑問文産出率を比較すると、全体的に前者のほうが高い。

前者では、3.1 に記載した基準に従って正答か否かを判断することができたが、後者では、判断に迷うことが多かった。結果的に、文法的に合っている意味としておかしいものは  $\Delta$  (wh 疑問文産出率に含めない)、意味としては合っているものは  $\circ$  (wh 疑問文産出率に含める) とした。

前者と後者では、プライムとターゲットの組み合わせも学生も異なり、さらに前者のほうが学生の TOEIC スコアも有意に高かったため、直接比較することはできないが、前者のほうがプライムの影響を受けている、すなわち統語的プライミングの傾向が見られるという可能性が考えられる。

### 3.3. 学生のふりかえり(産出文の書き起こしタスクとその効果について)

タスク終了後のふりかえりとして、各自の産出した質問文について気づいたことを学生が自由に書いた内容の一部を、以下に抜粋する。なお、読みやすさに配慮し、著者により微修正している。

<文法力について>

- タスクの内容自体は簡単だったけど、普段全然英語で質問する機会がないんだと感じたし、与えら

れている単語で質問を完成できないくらい、英語力のなさに自分でも驚いた。でも、そんなちぐはぐな質問でも正解したパートナーが凄いなと思った。

- 自分で質問文を構成する前半部分では間が多いうかがえる。
- 単純そうな構造でも深く考えてしまって、結局間違えてしまう。
- 主語の複数、単数の見分け、動詞の使われ方の判断が遅い
- 疑問視の疑問文を理解して答えることはできても、いざ作るとなるとやっぱり苦手だなと感じました。
- その時は気付かずそのまま話してしまっていたのですが、後になって録音を聞いていると聞いてみると **be** 動詞が抜けているだとか **it** があったほうがいいとか、文章が不自然なことに気が付きました。
- 自分で作る時に、動詞などの位置が不安定だった。
- 一番聞き出したいことは何かを考えて文の組み立てをするべきだったと思う。主語が何かわかっていなかった。文法がバラバラでした。
- 与えられた単語に何か補って文を作るのは、一から自分で作るよりも難しく感じました。留学から帰ってきて時間が経つにつれてすぐに単語が出てこないのを実感しています。

#### <話し方について>

- **easier** が **ether** に聞こえる。
- えー、あー、が多い。独特な発音をしているなと思った。
- とぎれとぎれに読みすぎて聞き取りにくかっただろうなと思いました。自分で聞いてみると特に思います。
- **The** の発音が **da** に聞こえていて意識が必要だなと思いました。文を読むときに強弱や流れがうまくつかめていないので単調な発音になっていました。発音に不安があるなとすぐ感じ取ることができるしゃべり方でした。
- 全部切って話しているので、どこを重要視して答えてもらうかが分からない話し方でした。
- 音に抑揚がないことに気付いた。アクセントに気を遣わずに読んでいることは問題だなと思った。英語なのにお経のようになってしまっていて、とても聞き取りづらく感じた。

#### <戦略や工夫した点について>

- ちゃんと文としてあっているかは確かじゃない

けど、このワークを理解している人になら意味は伝わるから、あまり変えずにそのまま話した。

- **Answer key** があることによって質問が作りやすくなった。
- パズルのように考えていた。まずは **Answer key** をみて回答を予測していた。そのあとで疑問詞の後に何を持って来れば **Answer key** のような回答が得られるかを考えた。

全体としては、あとから聞いてみてはじめて自分の文法的エラーや癖などに気づいたという旨のコメントが目立った。**wh** 疑問文を作成するための文法力についてだけでなく、発音を含む話し方に焦点を当てたコメントも多かった。また、自分なりの戦略や工夫した点についてのコメントは、タスクを作成する際にも参考になるものであった。

本調査では、録音した音声データを回収するだけでなく、学生にも自分の音声聞いて産出した **wh** 疑問文(ターゲット)の書き起こしをさせた。あとから著者が聞いて判別できない部分があることを想定し、録音直後に学生自身に確認してもらうことが本来の目的であったが、学生のふりかえりを読んでみて、その作業によって彼らがさまざまな気づきを得られることが分かった。普段の会話の中では客観的に自分の発話をふりかえることはあまりないため、学生にとって良い機会だったと思われる。著者にとっても今後の調査の参考になる貴重な資料となった。

### 3.4. 追跡調査(平叙文から **wh** 疑問文への転換タスク)

学期末テストの際、本調査でターゲットとして使用したものと同一 **wh** 疑問文が正解となるような平叙文を作成した。「“ ”内のフレーズを問う英語の疑問文を作成してください」というインストラクションを与え、**wh** 疑問文への転換タスクを実施した。ペアワークでいずれのワークシートで作業していても、何らかの形で理解または産出した **wh** 疑問文であることから、学生全員に同じタスクを与えた。当日の欠席者および翻訳課題と間違えていたケースなどを省いた 28 名 (**Student A**=14 名, **Student B**=14 名) のデータについて、表 2 に正答率を示す ([ ] 内の数字は、表 1 において同じ **wh** 疑問文に割り振った番号である)。なお、助動詞 (**do**, **be** など) が正しい位置で使われていれば正答と見なし、単複・時制の一致などに関する文法的エラーは考慮しないものとした。また、想定していた **wh** 疑問文が産出されない場合でも、意味が通っていれば正答とした。

表 2 wh 疑問文への転換タスクの正答率

#	問題 (平叙文)	解答 (wh 疑問文)	正答率
1 [2]	Fewer young people read “books”.	What do fewer young people read?	60.7%
2 [4]	An increasing number of people are buying “electronic books”	What are an increasing number of people buying?	57.1%
3 [6]	“Many readers” still prefer print books.	Who still prefer[s] print books?	32.1%
4 [8]	We feel “its distinctive texture and weight” when we hold a real book.	What do [can] we feel when we hold a “real” book?	78.6%
5 [10]	It’s easier for us “to concentrate on what we are reading”.	What is easier for us?	46.4%
6 [11]	This festival features “world-class performances”	What does this festival feature?	60.7%
7 [13]	The festival’s name comes from “The Marriage of Figaro”	What does [did] the festival’s name come from?	64.3%
8 [15]	The Marriage of Figaro was made by “Mozart”.	Who made [wrote, composed] The Marriage of Figaro?	28.6%
9 [17]	The festival takes place “in Tokyo” during the Golden Week holidays.	Where does [is] the festival take place [held] during the Golden Week holidays?	50.0%
10 [19]	“Popular music” is performed at the festival.	What [kind of] music is [are] performed at the festival?	67.9%

学生全体の正答率は 54.6%, Student A の正答率は 59.3%, Student B の正答率は 50.0%であった。

さらに, a) ペアワークと転換タスクの両方で wh 疑問文を産出した学生, b) ペアワークのみで wh 疑問文を産出した学生, c) 転換タスクのみで wh 疑問文を産

出した学生, d) ペアワークと転換タスクの両方で wh 疑問文を産出しなかった学生の割合を, 表 3 に示す(#1~5 が Student A, #6~10 が Student B)。

表 3 ペアワークと転換タスクの正答率の比較

#	a	b	c	d
1	64.3%	14.3%	7.1%	14.3%
2	57.1%	21.4%	14.3%	7.1%
3	14.3%	7.1%	14.3%	64.3%
4	64.3%	14.3%	21.4%	0.0%
5	42.9%	42.9%	0.0%	14.3%
6	42.9%	14.3%	21.4%	21.4%
7	42.9%	42.9%	7.1%	7.1%
8	7.1%	28.6%	14.3%	50.0%
9	7.1%	7.1%	35.7%	50.0%
10	42.9%	7.1%	28.6%	21.4%

タスクの内容も方法も異なるため, 直接比較することはできないが, 概して a または d の割合が b または c の割合よりも高いことから, 全体的な正答率は似通っていると言える。全体として, ペアワーク同様, 転換タスクにおいても助動詞の抜けが顕著なエラーであった。

(3) と (8) の主語疑問文については, 依然として構文が理解できていないことが明らかである。(3) では prefer の前に do か does を入れる傾向があった。(8) では, 同様の傾向に加えて, Who was the Marriage of Figaro made by? (正答), Who / What was made the Marriage of Figaro by? (誤答) など, わざわざ受動態にしようとする例が多く見られた。

(5) の正答率はペアワークと比較して, 転換タスクのほうがかなり低くなっているが, What is it easier for us? と unnecessary it を挿入する誤答が大半を占めていた。一方, (9) の正答率は転換タスクのほうが多少高くなっているが, 依然として take place の使い方が分からないと思われる誤答が多く見られ (e.g., Where does take the festival place?, When will be taken place the festival?), その内容もバラバラであった。

#### 4. まとめと今後の課題

本調査では, ペアワークにおける wh 疑問文の産出率および統語的プライミングの傾向について調べるため, 学生がお互いのパッセージについて交互に質問し合う形式で情報交換タスクを実施した。ペアワークと転換タスクは各 1 回のみの実施であったため, 日本人英語学習者の文産出の特徴は見られたものの, 学習効果について具体的に調べることはできなかった。両タスクは内容も方法も異なるため, 直接比較することは

できないが、転換タスクでは、文脈が与えられていないとはいえ、すべて理解または産出を経験した文であり、解答時間にも余裕があったにも関わらず、その正答率はペアワークにおける wh 疑問文の産出率と似通っていた。今後、授業の中でペアワークを繰り返し、転換タスクを事前・事後テストとして実施することにより、その学習効果を見る必要がある。

ペアワーク後の学生のふりかえりにおけるコメントから、同レベルの学習者同士のインタラクションであっても、統語的プライミング実験の手法でモデルを提示しながら、意味のあるやりとり（カバータスク）を行うことで、ある程度の学習効果を得られる可能性が示唆された。また、転換タスクに特有の現象として、疑問文は作れていても、肝心の wh にあたる部分を聞けていない例が散見された。wh 疑問文の構文をしっかりと頭に入れつつ、コミュニケーションの現場で何度も使用することが学習につながるのではないかと考えられる。

本調査では、お互いに相手のパッセージの内容は分からないまま質問をしたが、学生のふりかえりでも「相手の本文が分からない問題を出すのが少し難しかった」という指摘があった。カバータスクにもできる限り教育的効果を持たせるため、今後の調査では、お互いに質問を始めるまえに自分のパッセージを音読し合うこともタスクに含める。

本調査では、タスクの性質上、プライムとターゲット間で wh 疑問文の種類、語数、単語の難易度などを厳密に揃えることができなかった。また、ターゲットで動詞を提示するかどうか難易度に大きく影響することが予想される<sup>1)</sup>。統語的プライミングの傾向についてより詳細に調べるため、既存のテキストのパッセージを使用せず、オリジナルのパッセージを作成する可能性についても検討したい。

## 注

1. 匿名の査読者による示唆にもとづく。

## 付 記

本稿は、全国英語教育学会 2019 年度弘前研究大会で口頭発表した内容を、再分析の結果を含めて詳細にまとめたものである。

## 謝 辞

本稿は、科学研究費助成金・基盤研究 (C): 課題番号 16K02946『英語コミュニケーションにおける統語的プライミングを利用した統語処理の自動化促進』(研究代表者: 森下美和) および科学研究費助成金・基盤研究 (B): 課題番号 15H03226『日本人英語学習者のイン

タラクション (相互行為) を通じた自律的相互学習プロセス解明』(研究代表者: 原田康也) の助成を受けている。

## 文 献

- [1] 原田康也・森下美和 (2014). 「日本人英語学習者の英語疑問文産出にみられる傾向: 自動化のための訓練の必要性」『電子情報通信学会技術報告 TL2014-8』43-48.
- [2] 森下美和 (2018). 「英語母語話者とのやりとりにおける日本人英語学習者の wh 疑問文の産出傾向」『全国英語教育学会第 44 回京都研究大会発表予稿集』586-587.
- [3] 森下美和 (2019). 「情報交換タスクにおける統語的プライミングの傾向: 授業内予備調査をもとに」『全国英語教育学会第 45 回弘前研究大会発表予稿集』250-251.
- [4] 森下美和・河村まゆみ・原田康也 (2017). 「英語母語話者とのインタラクションデータにおける日本人英語学習者の wh 疑問文産出」『電子情報通信学会技術報告 TL2017-55』63-68.
- [5] Bock, K. (1986). Syntactic persistence in language production. *Cognitive Psychology*, 18, 355-387.
- [6] Harada, Y., & Morishita, M. (2016, September). *Reproduction and elicited production of English question sentences by Japanese EFL learners*. Poster session presented at the 22nd AMLaP Conference, Bilbao, Spain.
- [7] McDonough, K. (2011). Eliciting wh-questions through collaborative syntactic priming activities during peer interaction. In P. Trofimovich & K. McDonough (Eds.), *Applying priming methods to L2 learning, teaching and research: Insights from psycholinguistics* (pp. 131-151). Amsterdam: John Benjamins.
- [8] Morishita, M. (2011). How the difference in modality affects language production: A syntactic experiment using spoken and written sentence completion tasks. *JACET Journal*, 53, 75-91.
- [9] Morishita, M. (2013). The effects of interaction on syntactic priming: A psycholinguistic study using scripted interaction tasks. *Annual Review of English Language Education in Japan (ARELE)*, 24, 141-156.
- [10] Morishita, M., Satoi, H., & Yokokawa, H. (2010). Verb lexical representation of Japanese EFL learners: Syntactic priming during language production. *Journal of the Japan Society for Speech Sciences*, 11, 29-43.

## Appendix

Student #: \_\_\_\_\_ Class: \_\_\_\_\_ Name: \_\_\_\_\_ Date: 2019/ /

### [Student A] Music

Part 1 : 以下の「音楽」に関するパッセージを読み、あとでパッセージの内容についてのパートナーの質問に答えてください。本文を見ながら答えても構いません。

Much of the popular music that we hear these days is based on works of classical music. For example, Ayaka Hirahara's *Jupiter* comes from *The Planets*, composed by Gustav Holst. In Japan, classical music festivals are held at various places every year. La Folle Journee (ラ・フォル・ジュルネ) is a music festival that started in 1995 in Nantes (ナント), a port town in France. This festival features world-class performances in a relaxed atmosphere at reasonable fees. The festival's name comes from a play, *The Crazy Day*, or *The Marriage of Figaro*, made by Mozart. This event has now become popular not only in France but also around the world. Since 2000, it has been held in Portugal, Spain, Brazil, and Poland, and also here in Japan. The festival, which takes place in Tokyo during the Golden Week holidays, attracts many fans from all over the country. In addition to classical music, popular music that people are familiar with is also performed at the festival.

Part2: あなたのパートナーは「読書」に関するパッセージを読んでいます。お互いにどれだけ理解しているか、交互にクイズを出し合しましょう。以下の質問を番号順に、パートナーと交互に出し合います。質問には完成されているものと、与えられた単語を使って自分で完成するものがあります。正解をチェックして○か×を記入し、最後にパートナーの正解した数をスコア欄に記入してください。

	Questions to ask your partner	Answer key	○×
2	What / fewer young people / read?	books (for fun)	
4	What / an increasing number of people / buying?	electric books / e-books	
6	Who / still prefer / print books?	many readers	
8	What / we feel / when we hold a "real" book?	its distinctive texture and weight	
10	What / easier for us?	to concentrate on what we are reading and to lose ourselves in the story	
12	What can we write in the margins?	notes	
14	What can we underline?	our favorite passages	
16	What can be downloaded to a single reading device?	a large number of (e-)books	
18	What can we buy at any time and any place?	e-books	
20	What do readers depend on when they choose books?	their needs	

My Partner's name: \_\_\_\_\_ score: \_\_\_\_\_ /10

[Student B] Books

Part 1 : 以下の「読書」に関するパッセージを読み、あとでパッセージの内容についてのパートナーの質問に答えてください。本文を見ながら答えても構いません。

It is said that fewer young people read books for fun. An increasing number of people are buying electronic books, or e-books, while many readers still prefer print books. What are the advantages of print books and e-books? When we hold a “real” book in our hands and turn its pages, we can feel its distinctive texture and weight. It’s easier for us to concentrate on what we are reading and to lose ourselves in the story. We can write notes in the margins or underline our favorite passages. As for e-books, we can carry a large number of books that have been downloaded to a single reading device. If we have Internet access, we can buy e-books at any time and any place. Depending on their needs, readers will choose either print books or e-books according to the advantages each offers.

Part2: あなたのパートナーは「音楽」に関するパッセージを読んでいます。お互いにどれだけ理解しているか、交互にクイズを出し合ひましょう。以下の質問を番号順に、パートナーと交互に出し合ひます。質問には完成されているものと、与えられた単語を使って自分で完成するものがあります。正解をチェックして○か×を記入し、最後にパートナーの正解した数をスコア欄に記入してください。

	Questions to ask your partner	Answer key	○×
1	What is the popular music that we hear these days based on?	(Works of) classical music	
3	What is Ayaka Hirahara’s song which comes from <i>The Planets</i> ?	<i>Jupiter</i>	
5	Who composed <i>The Planets</i> ?	(Gustav) Holst	
7	When did a music festival called La Folle Journee (ラ・フォル・ジュルネ) start?	(In) 1995	
9	What is a port town in France?	Nantes (ナント)	
11	What / this festival / feature?	world-class performances	
13	What / the festival’s name / come from?	(a play, The Crazy Day, or) <i>The Marriage of Figaro</i>	
15	Who / <i>The Marriage of Figaro</i> ?	Mozart	
17	Where / the festival / during the Golden Week holidays?	(In) Tokyo	
19	What / music / performed at the festival?	classical music and popular music	

My Partner’s name: \_\_\_\_\_ score: \_\_\_\_\_ /10